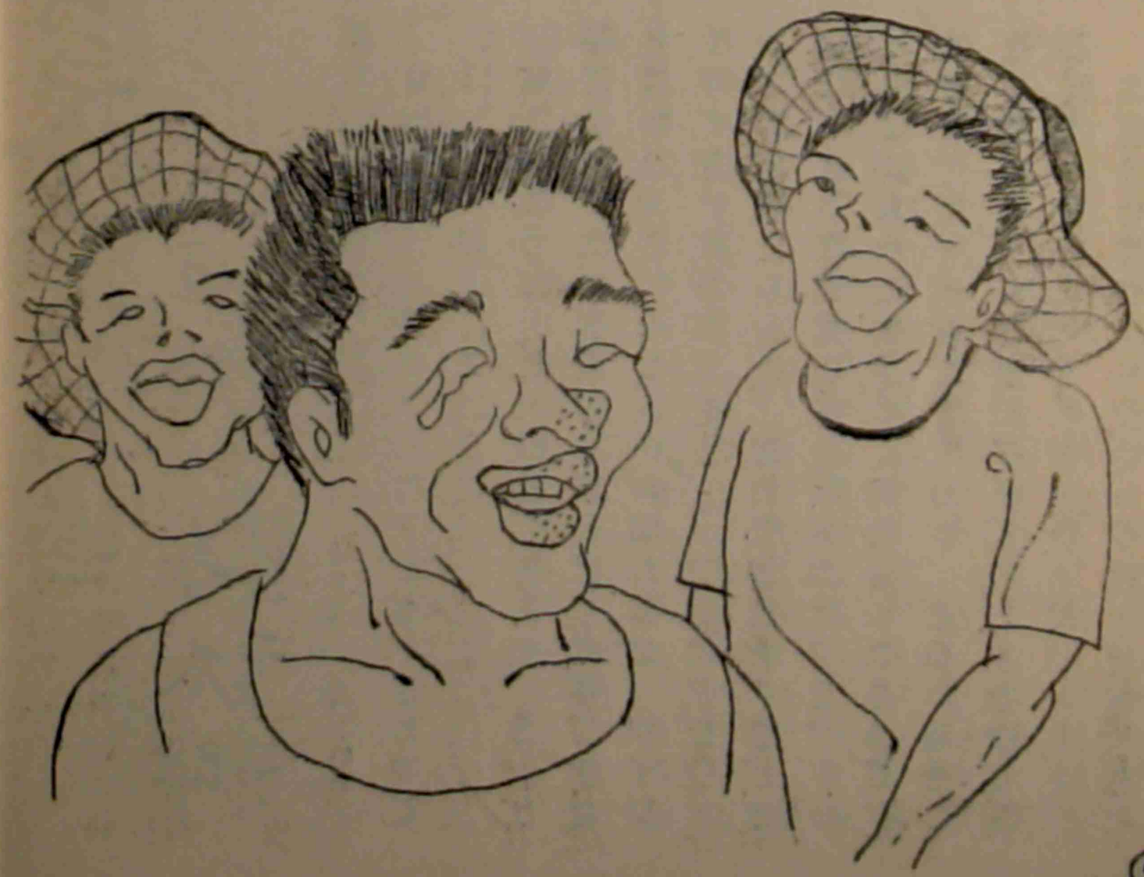
連載小説 第2回

蜂(はち)とまむしと土工(どこう)たち

日野善太郎
さし絵 紅茶キノ子

ヒロシがずっと前によんだ小説の中に、
「草の匂いはなつかしい匂いだ」
と書いてあったのをおぼえている。
でも、それはウソだ。あんなことを書く人は、芝生のようなところで、昼寝をしたり、女の子といちゃついたり、ぐらいのことしかしらない人にちがいない。
草や木の匂いは、いやらしくて頭がいたくなるような、ヘドが出そうな、どうにもたまらない匂いだとヒロシは思う。
ヒロシたちは伐採をやっている。
あたらしい宅造工事がはじまった。山をけずり、低いところをうめ、大きな団地をつくるのだ。
まず測量をするために、木を伐ったり、草刈らねばならない。
毎日毎日、ノコギリとカマとヨキをもってヒロシたちは山にはいった。
はじめのうち、それはとてもおもしろい仕事だった。大きな木はないので、仕事はかなりはかどった。十七人の仲間たちが、ワイワイガヤガヤさわぎながら、ノコで切ったり、カマでかったりした。昼の弁当を食べるときなど、まるで遠足のような気分だった。
ノコは松ヤニがつくと切れなくなるので、油をぬった。目立てヤスリや、砥石も用意した。真夏の太陽が照りつけても、木かげに入ると涼しかった。天然クーラーだ。
土方の仕事のつらさの一つは、目がくらむような夏の日盛りでも、太陽の直射から逃げ

られないことだ。しかし、伐採は楽しいので
みんなはじめは喜んでいた。土方天国だ。
だが、それもはじめのうちだけだった。
いちばん先にやられたのは、山桜の木にの
ぼって、鳴うたまじりで枝をはらっていた元
鉄道員の中村だった。
「うわあ、ああ」
という悲鳴で仲間たちがふりむくと、中村
は今にも落ちそうになりながら、木の枝にし
がみついていた。
「何や。どないしたんや」
かけよった仲間たちの輪の中へ、ハサミは
顔を押さえてうずくまった。ハサミは中村の
仇名だ。むかし鉄道員だったとき改札係だっ
たというので、そんな仇名がついたのだ。
「どうした、顔を上げてみろ」
とテッポウが言った。テッポウは村上の仇
名だ。ホラばかり言うのでテッポウとよばれ
るのだそうだ。なぜ、ホラをいうとテッポウ
なのかヒロシはしらない。



顔をあげろと言われても、ハサミはちいさ
な子供のように、いやいやをするばかりだ。
テッポウが、ハサミの手をつかんで強引に
はなした。いない、いないバアみたいに、ハ
サミの顔が、もぎはなされた。のひらの中か
ら出て来た。
「痛い、痛い」
その顔を見て仲間たちは笑いころげた。
鼻のあたまと、唇のはしが赤くはれあがっ
てハサミはまるでひょっとこみたいな顔にな
っていた。蜂に刺されたのだ。
笑っているみんなより、ころげまわりたい
のはハサミの方だったろう。
「蜂に刺されたときは、これがいちばんや」
テッポウが口の中に指を入れ、唾クソをほ
じくって、ハサミの頬につけようとした。
「きはがい、やめろ」
きたない、やめろと言いたいのだけれど、
唇がはれているので、きはがい、きはがいと
いいながらハサミは逃げまわった。
「アホ、そんなら自分のでせいや」
頭に刺されたのはハサミだけではない。毎
日かならず誰れかがやられ、やられた奴はで
こぼこな顔をしていたがった。
しかし、蜂の被害は大したことはない。放
っておいても翌日ははれがひき、いたみもと
まる。
それにヒロシたちは時々蜂退治をやった。
蜂の巣をみつけると、新聞紙や、ボロ切れ
をまるめて竿の先にくくり、火をつけて巣を
焼くのだ。
どんなとき、テッポウがいちばん勇敢で上
手だった。テッポウは焼けた巣の中から、蜂
の子を取り出して食べた。
「うめえぞ、食えや」
と仲間にもすすめた。
蜂の子は、ウジ虫みたいな姿をしているの
で仲間たちは気味悪がった。
「アホやなお前ら、これを食うと精がつく
んやで、ビタミンなんか、A、B、C、Dか

ら X、Y、Z までみんなはいったる」
テッポウがしきりにすすめるので、ヒロシも、きつね色になったやつをつまんで口に入れた。
「な、あまいやろが」
とテッポウが言った。ヒロシはうなずいてみせたけれど、かまずに呑みこんでしまったので、味がわかるはずはなかった。
だんだん慣れてくると、みんな蛙の巣をさがしてまわるようになったから、蛙の被害はなくなった。
それより困ったのは、暑さと草の匂いだ。山の中の木かげでする仕事だから、天然クーラーで涼しくていいと思ったのは、はじめのうちだけだ。
苅れば苅るほど、伐れば伐るほど、木かげはなくなる理くつだから、しびいにあつくなるのは当然だけど、あつさがちがうのだ。
山の中の木かげは、枯れ草と、くさった落葉がつもっている。

五年の落葉の上に今年の落葉がつもる。そのうえに来年の落葉がつもる。そうやって何年ぶんだか、何十年ぶんだかつもっている。
上のほうは、かわいているが、下のほうは、くさっている。水気をふくんでいて、じゅくじゅくしている。歩くと、すねのあたりまでずぶりと入る。なまあたたかくて気色がわるい。
朝はまだいい。だんだん日が高くなると、落葉のふくんだ水気が、むれてくる。足もとから湯気。空からは太陽。上と下から責められて、じわりじわりと炎熱地獄だ。
冒わたで首をしめるということわざがあるけれど、これもどうやらそれに似ている。したいにからだがたるくなって、頭がぼんやりしてくる。
それと草の匂い。くさった落葉。
十時ごろになると、道具を放り出して逃げ出したくなる。「草の匂いはなつかしい」なんて、ヒマなやつのほざく寝言だ。
胸がむかついてくる。頭がいたくなる。

からだはむし風呂に入り、首から上は真夏の太陽に焼かれている。ちょうど、そんな感じなのだ。それでおまけに仕事をしなければならんのだ。たまったもんじゃない。
十二時ごろになると、いつも誰れかがケツわった。ある日なんか、だれが言い出すともなく、全員もどってしまった。
もちろん、親方はかんかんになっておこった。
「お前ら、土方の根性もたんのか」
死んだ竹やんと同じことをいう、とヒロシは思った。
竹やんは酔っぱらって、飯場の階段から落ちて死んだ。でも酒に弱かったのではない。
竹やんは働き者で、まじめで、残業も早出もきらわなかった。しんどくて休まなかったし、雨でも仕事があれば現場に出た。
しまいにころされるといいながら、親方のいうことにそむかなかった。つかれは酒でごまかして働いていた。死ぬ前はアル中になっていたのかもしれない。
その竹やんの口ぐせが、
「土方するなら土方の根性もて」
だった。
「酒ほのんでも、現場には、はってでも行く」
だった。
だが、竹やんの本音は
「このままじゃ仕事にころされる」
だったのではないだろうか、とヒロシはこのごろ思っている。
竹やんは仕事にころされると思いながら、意地をはっていたのだ。そしてそんな自分をごまかすために酒びたりになって、あげくのはてに、からだを弱らし、あんな死にかたをしたのだと思う。
それはともかく。
親方がいくらかんかんになっても、こっちのからだがもたなけりゃ仕方がないのだ。そこは親方にも判ったとみえて、次の日から現

塔に氷水を入れてくれた。
氷水ぐらいでは間に合わないのだが、そのうちに山の伐採はおわって、のこりは谷川の近くだけになった。
そこはかなり広い草原で、一年中じめじめしているところだった。近くに市の水道局のポンプ場があって、しかし番人はいなかった。
草の背は高かったが、山とちがって木がすくないので、だいぶ仕事はらくになった。そのかわり人数をへらされた。
いつも足もとを水が流れているようなところなので、こんどは日かげがなくても涼しかった。仕事ははかどった。
しかし、ここにも伏兵があった。

蛇がいるのだ。
草ぼうぼうとよもぎが多かったこがあり、水があるのだ。蛇がすむにはおあつらえむきなのである。
小さな蛇でも、ちょろちょろしていると、

あまり気もちのよいものではない。
まして一米五〇センチもあるような、青大将がぐぐぐをきいているのに出会うと、さすがにぎょっとした。
ぎょっとするのは人間のちだけでなく、ホントは蛇のちだって、びっくりしているのである。
びっくりした拍子に、青大将が何やら黒いものを吐き出した。
「何やろ」
とハサミが棒きれでつついた。黒こげの焼き芋みたいだが、全体にねばねばしている。
「蛇は芋も食うのかな」
とヒロシがいった。
「何いうこんのや、これはもぐらやで」
とテッポウが言った。
そういわれてよくみると、からだ中にもがはえて、それがベットリぬれていた。もぐらのようにも、ねずみのようにも見えた。
「まるごと呑んでたんやなァ」

「気色わるウ」
と、ヒロシとハサミがいうと、
「何やこんなもん」
とテッポウが青大将をつかまえた。片足で蛇の尾をふんで、かま首をつまんで、テッポウは蛇と背くらべをした。たしかに一米五〇センチはあった。胴まわりだって、すりこぎぐらいのふとさはある。
「そんなことして、咬みつかれへんか」
ヒロシが言うと、ハサミも、
「可哀想やから放したれや」
と言った。するとテッポウは、なお得意になって、青大将をマフラーのように首に巻いて言った。
「こんなとこ、写真とったらええんや・記念になるで」
青大将は図体は大きいが、それだけのことで、慣れると何ともなかったが、ぶむぶはそうはいかない。人の気配におどろいて、草もらから、いきなり飛び出して咬みつくのだ・

それに、ぽむぴには毒がある。
ヒロシは長い竹をひろって来て、草むらをばたばたたたいて、ぽむぴを追いはらってから草を苅った。
さいわい、誰れもぽむぴに咬まれた者はなかった。それどころか、テッポウはまむしをつかまえた。
「飯場へ持ってかえって、ぽむぴ酒をつくるんや」
テッポウはそう言って、ありあわせの一升びんにぽむぴを入れて、仕事のつづきをはじめた。一升びんは水筒がわりにお茶を入れてもって来てあったのだ。
二時間ほどして気がつくと、ぽむぴはびんの中でぐったりしていた。
「こらあかんわ。死んでもうたら、ぽむぴ酒にはならんわ」
テッポウは、ぽむぴを取り出して、小枝を一本くわえさせた。
「こうやって咬みつかせると、ぽむぴのやつ毒のある歯で咬みついてはなれんのや。そこをこうやってしごくと、枝に牙と毒のふくろがついてくる」
説明しながらテッポウが、ぐいと枝を引いたが牙はぬけなかった。
まむしのやつ、弱っていて咬みつく力もなくなったらしい。
「ほんまは木の枝より、わりばしのほうがええねんけどな」
言いわけしながらテッポウは、草苅りかまで、ぽむぴの牙をほじくり出して、
「俺は歯医者もうまいんや」
と笑った。
それから、枯れ枝をあつめて来て、ぽむぴのかば焼きをつくった。
「まあ食べてみいや」
テッポウは、かば焼きを三等分して、ヒロシとハサミにわけてくれた。
あおらっ気がなくて、パサパサした味で、骨が多くて、ぽむぴは、ちっともうまくなか

った。
その夜、ヒロシは眠れなかった。
飯場の外へ出て、うろうろ歩きまわった。なぜだか、ややんのことばかり考えた。
ヒロシは、ややんの葬式のとき、香典をくすねた。そのことは誰れも気づいていない。
その金でヒロシは町へ出て飲んだ。酒はにがくて、やけ酒みたいだった。飲んでも飲んでも酔わなかった。
金はまだ残っている。葬式の三日後に宅地造成の仕事で、野丁場へ飯場がうつったので使うひまがなかったのだ。
月はかすんでいて、むしあつい夜だ。風がなくて虫の音もきこえない。
月を見ていると、死んだややんが、どこかさくやしがっているような気がした。
「ちくしょうどうとう殺られちゃったい」
そういってる声がきこえるようだ。
だから死ぬ者食をっていうんだ。いくら土方の根性でも死んだら元もきもない。そう心の中でつぶやきながら、ヒロシは、いつかオレも竹やんのように死ぬのかもしれない、と思った。
「オイ、何してるんや」
誰れかと思ったらハサミだった。
「眠れないんだ」
「俺もや」
二人が顔を見合わせたとき、もう一人の影が近づいた。
「おい、お前らも眠れへんのか」
テッポウの声だった。
「何や、からだがカッカしてなア。ヘンにこーふんしてんのや」
とハサミがこたえた。
「そやろ、まむしの効き目や」
と、近づいてきたテッポウが、唇をひくひくうごかした。
あ、そうだったのか、とヒロシは昼間のかば焼きのことを思い出した。

《来月号につづく》